ねこみの
猫蓑通信

第60号
平成17年（2005）
7月20日発行
（年4回発行）

ビジュアル発想のすすめ

青木秀樹

ここ数年、連句協会全国連句大会、国民文化祭をはじめ各地での連句大会や募吟が増えている。連句大会への参加、作品の応募は他流派との交流により自らの実力を計る機会ともなる。他を知り、己を知ることは連句修練の上で重要なことである。

このような大会に参加する人々はベテラン上手ばかりとは限らず、初心者もかなり多い。連句各流派にはそれなりの式目があり、それが微妙に異なっていることは周知のことである。交流の実を挙げるためには自派の式目を押し付けずに、小異を捨て大同につく心構えが必要になる。

そのような時に感じることは平素一座する猫蓑会のメンバーの水準が高くかつ速吟の人が多いことである。一座して連句を巻くことで実力が涵養されることが分かる。

速吟・遅吟については「ねこみの通信」第四十号に東明雅先生がお書きになったものがある。「人によって速吟の方も居られ、遅吟の方も居られ、大方は個人・個人の性格・能力・才能・感性など、先天的なものによるものでしょうが、それだけでなく、その人の修練によって左右されるところではないでしょうか。」と述べられ、その後に「去来抄」にあるエピソードを紹介されている。

綾のねまきにうつる日の影
泣く泣くも小さき草鞋もとめかね　去来

この前句が出て、一座の人々は暫く付け悩んでいた。この時、芭蕉先生が「この句は身分高いご婦人の旅であろう」と言われた。それで私はすぐにこの句を付けた。その座に居た坂上好春（貞門の俳人）は「貴婦人の旅と聞いて、忽ちに句が出来たのはさすが蕉門の人々の修練は格別なものがある」と感心した。

というものである。

ところで、その明雅先生が無類の速吟であった。猫蓑会草創の頃、連句復興に情熱を傾けられた先生と初期のメンバーが切磋琢磨したことは知られている。先生の影響と修練が猫蓑の速吟の源であろう。また、明雅先生は速吟とともに出される付け句が実に多様性に富んだものであった。ある時、明雅先生に「どうしたら、同時にいろいろなことを思いつかれるのですか」と質問したことがあった。先生は笑いながら手を横に振られた。自分で考えろということだと私は解した。

連句の付けの手法として支考の「七名八体」が知られているが、実際の連句の座での発想は前句からの連想によることが多い。

連句はことばを扱う文芸であるので、前句は当然文字で書かれている。文字には意味があり、どうしてもその意味に引きずられる。貞門の「もの付け（詞付け）」、談林の「こころ付け（意味付け）」にはそれで十分だろうが、「余情付け」となると文字からの連想では発想に限りがあるのではなかろうか。

明雅先生の速吟と多様な発想はマルチスクリーン型のビジュアル発想なのではないかと実は思っている。すなわち、前句を頭の中で映像化し、その映像にあるものを発想の原点にするという手法である。動画でも、静止画でも、また精密画でもスケッチでも、何らかの映像として前句を捉え、そこから発想しようというのがビジュアル発想である。水平思考型の自由な発想を可能にするものである。またこの手法で、意味不明、映像不可能の付け句が生まれることを阻止できる。

連句の映像性に注目したものに寺田寅彦氏の「モンタージュ論」（昭和十一年）があるが、この領域についてはまだ開拓の余地が大きい。絵が苦手という方もおられようが、ビジュアル発想を試されたらいかがであろうか。

現代連句と序・破・急

東　明雅

序・破・急の理論は、舞楽における拍子の緩急に発し、連歌・能楽に取り入れられ、俳諧にも及んでいる。「楽にも序・破・急のあるにや。連歌も一の懐紙は序、二の懐紙は破、三・四の懐紙は急にてあるべし」（筑波問答）と二条良基（一三二〇～一三八八）は述べている。これは勿論百韻の場合であるが、俳諧、歌仙の場合にも、「一巻、表は無事に作すべし。初折の裏より名残の表半ばまでに、物ずきも曲もあるべし。半ばより名残の裏にかけては、さらさらと骨折らぬやうに作すべし」（去来抄）とあり、芭蕉も「一巻、表より名残まで一体ならんは見苦しかるべし」と言っている。（同書）

現代連句においても、俳諧の伝統を踏襲して、表―序、裏・名残の表―破、名残の裏―急と見る説が多く、これを裏を破一段、名残の表を破二段と見る説もある。故根津芦丈師は「表六句はまず客間に通されて昔なら裃をつけてかしこまっている気持ち、ここではいろいろな制約があって自由な表現活動は許されない。裏の十二句に入ると裃を取り、まずは羽織・袴を付けている気持ち、いろいろな制約が解除になるが、それでもややかしこまった気分が残っている段階、そして次の名残の表十二句はその羽織・袴も取り去って、本当にのびのびと自由を味わう気持ちである。名残の裏となると、また羽織・袴を付け、しかも軽々と一巻を挙げるように心掛くべきである」と教えられた。まことに適切で、且つおもしろい譬えであり、これがやはり、現代連句における序・破・急の最も普遍的な考え方であると思う。

ところが、この序・破・急による構成が、現代連句ではあまり守られなくなって来たようである。流石に、表六句の制禁を破るものは殆どないようであるが、裏に入るや否や、裃どころか、羽織・袴まで脱ぎすて、われがちに、前句に構わず、突飛な孕句を付けて、連衆を驚かすのを得意とする風潮が年とともに流行し、一巻の裏から名残まで一体の、見苦しい作品が多くなって来ているようである。

これは一座における連衆心の欠如によるのではないだろうか。昭和七年刊の「連句の実際指導」（三森準一）にも「一巻進行上の諸注意」の中に「一巻中、聞こえよき句、手柄ある句は自分が付けるといふ付け方はよろしからず。対手にも功名を譲り、又よき場面に仕向けて調子の高低、作意の緊張緩徐あるがよろしく、即ち巻面（まきづら）の成績も席上の友誼も、共に和の大道に合するのが連句の本領である」とあるのを見ると、既に昭和初年にも、このような風潮が存在した事を知るが、爾来七十年に及んでその弊は益々重くなって来ている。

さらに考えれば、現代連句ではあまり歌仙が作られなくなっているという実情が、懐紙形式あるいは序・破・急の作り方に対する疎遠をもたらしたと言う事も言えるだろう。

歌仙三十六句が現代生活、あるいは現代メディアに適合しなくなった為、それに代わるいろいろな短形式が考えられている。胡蝶（二十四句）、ソネット俳諧（十四行詩）、居待・出花（十八句）、非懐紙（十八句～二十四句）、二十韻（二十句）、蜉蝣（二十八句）など。たとえば非懐紙などは懐紙形式を打破したことで画期的な形式だと思うが、折もなければ表・裏もない、月・花も自由に処理されている中でも、序・破・急を基にして流れの変化を楽しむ事になっている。

それはそれで結構であるが、この際、私の希望を申せば、せめて毎年一回の国民文化祭の募吟連句には歌仙を採用し、半歌仙という序・破・急のはっきりしない形は採用しないようにして貰いたいという事である。

ねこみの第二十九号
一九九七年十月号より転載

第十九回亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧

次第

		役割
一	席改め	
二	席入り	
三	配硯	宗匠 副島久美子
四	献花	脇宗匠 倉本路子
五	執筆呼び出し	副宗匠 近藤守男
六	文台捌き	執筆 髙橋豊美
七	俳諧興行	知司 林鐵男
八	花前	副知司 根津忠史
九	玉串奉奠	同 佐古英子
十	花の句披露	座配 棚町未悠
十一	端作り	座見 松島アンズ
十二	吟声	花司 鈴木千恵子
十三	文台返し	配硯 式田恭子
十四	作品奉納	同 山本要子
十五	納硯	同 横山わこ
十六	挨拶	老長 原田千町
十七	退席	

平成十七年四月二十五日

於亀戸天神社

藤祭奉納 俳諧之連歌

二十韻 「弥栄を」 副島久美子捌

弥栄を祈る俳諧藤祭　秀樹
蜂の集める幸の蜜　千町
遠廻りボートレースの応援に　忠史
おむすびの芯昆布の佃煮　路子
甚平(ウ)の短き袖を月照らす　わこ
ハンモック吊るてぎは鮮やか　鐵男
密林のサンクチュアリにふたりきり　アンズ
結婚したら豹に変身　未悠
乳色が売物の湯の透きとほる　守男
三十年振り卵値を上げ　健悟
日韓(ナオ)の交流熱くキムチ鍋　達子
手毬をつけば鬼が見てをり　有子
絵蝋燭泪の跡がうす紅に　恭子
片恋ゆゑに滲む満月　千恵子
さぬかづらつないだ指の脈打ちて　要子
茸に酔うたか酒に酔うたか　三実
シテ(ナウ)の声太郎冠者出て床を踏む　英子
おさらひの棋譜残すパソコン　美奈子
花びらの霏々と散りこむ旅鞄　久美子
鰊雲にしづもれる海　執筆

風雨強かるべし

―執筆を終えて―

髙橋豊美

この度は正式俳諧で、執筆をやらせていただきまして、ありがとうございました。秋の時雨忌の折は、やるだけで精一杯でした。この時は、所作はゆっくりと落ち着いて、吟声は大きな声で単調にならないようにと、青木秀樹さんから指導されました。春の藤祭では、吟声に工夫が欲しかったので、能楽教室の案内を見て、通ってみました。数回の通学で、ものになるはずはありませんが、謡の正座して腹から大きな声をだす方法は、役にたちました。謡独特の節回しは、吟声に使えましたが、問題もありました。現代連句の吟声なので、カタカナや現代語の入った句は、節を付けると妙になります。連歌に近い句は、謡の節回しによく乗ります。発句・脇・恋・月・花・挙句に主に節を付けました。やはりここがポイントなのですね。執筆で一番難しいのは、進行です。執筆登場から退場まで、きっかけを全部自分で出して、自分で演じなければなりません。テンポも重要です。

沸淵健悟さんの執筆の折のビデオをお借りして、何度も見ました。会場の隅に腕を組んで見つめる明雅先生の姿がありました。先生に見て頂けなかったのが、本当に残念です。

時雨忌の日は台風が来て、大雨でした。藤祭の日も雨でした。風雨に負けないように、声を出したつもりです。

藤祭奉納二十韻

「亀鳴くや」　佛渕健悟捌

亀鳴くや鳴かぬや神苑（には）の日照雨　健悟
千紫万紅藤の様様　英子
夏近きタンデム自転車軽快に　冬乃
子の宿題につき合ってやる　泉子
夢（ウ）も見ずふと目覚めれば真夜の月　一恵
メールを開く漸寒の閨　華蔵
どぶろくの飲み仲間から良い仲に　恵
負け犬なんて言ったのは誰　乃
銀行の負債大きく夕刊紙　同
最終楽章シンバルで締め　泉
沈（ナオ）思して環状線をひと回り　蔵
哲学教授若手台頭　英
電子辞書落とし失くした三万語　恵
氷上霧ふ繊月の舞　泉
凍蝶の君を溶かして夜もすがら　英
国士無双を振り込んでゼロ　恵
潮騒（ナウ）のひときは高きバルコニー　乃
女系家族の孫もひ孫も　蔵
団体をどっと押し出す花の駅　同
春曙に匂ふ山の湯　執筆

連衆　佐古英子　百武冬乃　青木泉子
山崎一恵　山田華蔵

「赤き下駄」　式田恭子捌

藤波や石段上る赤き下駄　恭子
春の名残りの甲羅干す亀　良子
郊外の店内放送のどらかに　忠史
日曜画家はパイプくはへて　守男
夏月（ウ）に旅のプランを母と娘と　靖子
少し固めに茹でる冷麺　久美子
好き同士でも割勘の間柄　久
薙刀ならひ夫に従ふ　史
空高く鳶の舞ひゐる伊豆の海　良
名所グッズを積んだ引売り　男
酉（ナオ）の市大き熊手を振る兄い　久
年の用意を又も省略　史
カルチャーと講演会の梯して　良
そぞろ寒なり抗日のデモ　靖
背きつつぞっこんとなる閨に月　久
臍の刺青愛づる秋の夜　良
ロボット（ナウ）の家政婦とする英会話　靖
ガソリンフィーはつけと決めてる　恭
三代の御堂隠して花吹雪　史
谷のかなたへ舞へる蝶々　靖

連衆　本屋良子　根津忠史　近藤守男
関口靖子　副島久美子

「雨あがり」　峯田政志捌

雨あがり師も微笑まむ藤まつり　政志
聞かまほしきは照鶯の声　孝子
春の服鏡の前に選びゐて　ふみ
大きな箱の届く宅配　芙紗
山麓（ウ）の家まばらなり月涼し　同
河湯に湧ける蛍幾万　孝
観覧車ふたりで愛の一時を　豊美
性格よりもイケメンが好き　み
道心の作務衣きりりと紫紺色　孝
日溜りの猫欠伸ながなが　み
霜枯（ナオ）れの遊具をなほす槌を打ち　紗
ワイン・ウォッカ積んで来る橇　孝
囚はれの姫の唇盗む兵　同
姫娥の光あせて久しき　美
さびさびと風におわらを唄ふ盆　志
冗語の石に座り銀杏　紗
ポケット（ナウ）を叩くたび殖えビスケット　み
手品のやうに消えし$札　美
花吹雪渦巻きながら空堀へ　み
尺塩振って焙る若鮎　美

連衆　坂本孝子　中村ふみ　根津芙紗
高橋豊美

「撫牛や」　浅賀丁那捌

撫牛やとぎれとぎれの藤の風　丁那
春惜しむ貌池に揺れをり　蓉子
浅蜊飯色つややかに炊きあげて　碧
小路の奥の奥の付合　ゆみを
端居して崩るる膝を月が見る　洋
抱かれて浴衣少しほつれぬ　路子
あいつにはポイズンピルも効かぬらし　を
白馬の騎士か乗っ取りマンか　碧
百塔の鐘いっせいに鳴る朝　那
雪の醸せる葡萄酒のあり　路
空遠き越後の山はさみしいぞ　を
グループホームの案内舞ひ込み　洋
義経と静の札が出湯を分かつ　路
もののあはれを知り初むる秋　碧
月に吠ゆ生きとし生けるものは皆　蓉
毬藻の育つ湖の澄みたる　洋
きれながの仏の御目に魅せられて　碧
完全数の不思議解かばや　蓉
はらはらと回廊の花散るままに　を
しゃぼん玉追ふ子ども等の歌　洋

連衆　五味蓉子　松本　碧　青島ゆみを
河端　洋　倉本路子

「宮の藤」　佐々木有子捌

甲羅干す亀と仰ぐや宮の藤　有子
東風渡りゆく朱の欄杆　文子
サキソフォン愉しむ人の麗らかに　郁子
パティシエの焼く香ばしき菓子　良彌
月凍る巴里の下町石畳　文
ほーほーほーと梟の森　彌
ケータイでけふのデートを約し合ひ　郁
頬の覚えし髭の感触　文
しみじみと百済観音伏し拝み　郁
襲名興行半ば乗り切る　文
康介君つぎも頼むよ平泳　郁
マスクメロンにかぶりつきたり　彌
砂の丘祖国ありやと問ひし詩　文
隠岐の旅にて出逢ひ爽やか　郁
バイクの背キッスマークの浮ぶ月　彌
1DKに乏し妻待つ　文
夢なりし書道教室定年後　郁
ベネチアングラスロゼのワインを　彌
雪折れの三春の花も真っ盛り　郁
幼児遊ぶ陽炎の中　彌

連衆　橘　文子　東　郁子　佐藤良彌

「社の亀」　山田美代子捌

行く春や社の亀は宙仰ぎ　美代子
おいでおいでと揺れる藤房　秀樹
奴凧親から子へと伝へ来て　利子
W形に決める口髭　洋子
月冴えて星座観察ままならず　幹子
夜啼きうどんに寄り添ふは誰　樹
きのふけふ逢ったばかりで深い仲　利
血液型が示す運勢　洋
上海の旅の計画振りだしに　幹
ペットボトルは投げる物なり　利
釣堀は一家総出でがんばって　洋
昼寝の夢にのっぺらぼうが　洋
キスマークうまく隠せず貼り薬　幹
不器用な彼ついて来るなと　樹
荒寥の月明り射す番外地　洋
ぶらり仙人瓢箪に酒　樹
村芝居幟に名あり団五郎　樹
メジャーリーガー記録気にして　幹
戦没のみたまと共に花惜しむ　利
山裾の牧走る若駒　幹

連衆　青木秀樹　梅田利子　大島洋子
古賀幹子

「揺れ合うて」　山本要子捌

揺れ合ふて池面に触るる藤の房　要子
頭を上げて鳴ける亀達（ども）　弘子
立て雛事ある毎に直すらん　かりん
書き取り宿題見せに来る吾子　達子
フット（ウ）ボールシーソーゲーム夏の月　和弥
レモン水ぐっと一息に飲み　ジョウ
まだ癒えぬ恋の傷痕酸っぱくて　ん
彼の写真はすべて返却　弘
よいしょっと父祖伝来の胴間声　弥
レッドアローの着いた山里　ん
妖精（ナオ）もけものも集ふ暖炉際　ウ
新法王に祈り捧げる　弘
世紀経てネオナチ党が台頭し　ウ
木賊のような風の客人　ん
月光に描く熟女をかき抱き　達
忘れ扇にひょんな落款　弥
ワイ（ナウ）シャツは形状記憶ばかり着て　ん
シロホンで弾くカノンメロディ　要
来し方を諾ふ如く花を追ひ　弘
巣立ちの鳥にあげる盃　達

連衆　市野沢弘子　登坂かりん　篠原達子　権頭和弥　林ジョウ

「心字の池」　武井雅子捌

たもとほる心字の池や藤の波　雅子
雨など少し降るもあたたか　文人
鳩羽色洋装のひと利茶して　あかり
パソコン画面遊ぶトランプ　千恵子
あかあかと蛸も眠れぬ月の海（ウ）　やすお
汗の冷えゆく逢引の宿　景翠
祭壇であやまち悔いる恋もあり　お
報道陣をぴしゃり閉め出す　り
明治座に幟はためく歌手芝居　人
可盃に酔ひて候　翠
消防車サイレン響く後頭部（ナオ）　千
売れぬ小説売れる竹炭　人
いやなあのすかたん男振ったろか　翠
するりと乗った逆玉の輿　同
月の暈里山墨絵軸のごと　り
紅葉焚きをり斑鳩の寺　お
レトリバー散歩させつつ柚餅子食む（ナウ）　千
傘寿の我に曾孫授かる　翠
重たげに楊貴妃桜花盛り　千
はや春眠の午後の教室　お

連衆　二村文人　中田あかり　鈴木千恵子　花崎やすお　岩垂景翠

「末の滴」　鈴木了斎捌

藤房や末の滴の雨の色　了斎
タクシー降りる春のスカーフ　三実
もらひ来し仔猫のいつか鳴き止みて　真呂
百枡計算兄に教はり　嫋
寒月に銘酒地酒の揃ひつつ（ウ）　麻子
スキー列車を待つペアの服　央子
柔らかな君のシーツにもぐり込む　実
全神経が耳に奔流　央
合併も買収もあり唐突に　嫋
七連敗に五連敗次ぐ　麻
説明書見ては茅の輪をくぐりをり（ナオ）　央
薄馬鹿下郎跋扈（ばっこ）する街　呂
ロボットは子守私は昼デート　麻
ほめて育てたうちの宿六　嫋
月へ行く鞄に入れる陀羅尼助　同
バターライスはサフランで染め　実
サーカスのジンタを乗せて秋の風（ナウ）　呂
母の好みし桟留（さんとめ）の縞　斎
花尋めつ万葉歌碑を経巡りつ　呂
畦塗りゆけば光る黒土　央

連衆　滝沢三実　木村真呂　八代　嫋　内田麻子　遠藤央子

「雫伝ふ」　梅田實捌

藤の房伝ふ雫や太鼓橋　實
姫虻かそかささやける耳　淳子
壷焼の屋台に腰を落着けて　常義
望遠鏡に遠く山脈　アンズ
オープンカー月畳みつつ九十九折り　美奈子
オスカル様と巴里祭する　奈
いとしげに鎖骨のくぼみ撫でてやり　淳
短音階の木琴の音　義
ロボットの楽団人気地球博　ア
マカロニよりもコンクラーベか　奈
貧富の差さらに広がる社会鍋　ア
懐手解きやをら出す知恵　淳
パソコンを合切袋に持ち歩き　奈
パウダールーム忘れ物多々　義
月青しじっと二人で黙ってる　淳
君は野菊で僕は竜胆　ア
何気なく小鳥網あり峠道　義
古き神馬の像の天翔け　ア
花舞ひぬ酒呑童子となりにけり　淳
わが背を越えるしゃぼん玉吹く　奈

連衆　上月淳子　生田目常義　松島アンズ　鈴木美奈子

「天神の藤」　横山わこ捌

ありがたき天神の藤盛りなり　わこ
四月の慈雨に育つ紫　壽子
春スキー便りに写真添へられて　好敏
愛犬抱いてソファで一服　敬子
重力の加減はこうと弥次郎兵衛　鐵男
傾く恋と振り返る恋　敏
夏の夜はおまへを乗せて月に漕ぐ　男
サマーコートが揺れるひらひら　敬
博覧会背丈そろへて万国旗　壽
まあるくなって開く弁当　敬
口切の茶事の準備を念入りに　壽
風花の舞ふ禅寺の門　敬
青道心十七歳の狂ほしく　壽
女星尋ねる濡れ髪のまま　敏
望の夜のとめど話はうす情　壽
新走りなる旨し地のもの　わ
いい奴と云はれて生きる窮屈さ　男
法のすきまを株で儲けて　敬
掘り出さる花の化石の数多なる　敏
鳥になりたい種をまく人　男

連衆　杉山壽子　豊田好敏　須賀敬子　林　鐵男

「菅公に」　西田一枝捌

菅公に捧げる酒や藤祭り　一枝
心字の池に亀の鳴く頃　暁巳
春風を真行草と書き分けて　千町
揚げまんぢゅうをお土産に買ふ　遊民
月涼しモスクワ回りのジャンボより　未悠
白夜に実るスッチーの恋　巳
全頁女名前の電話帳　町
羽根で払ひぬ消護謨の屑　同
億といふ金が動いて和解とか　民
炉開きに出す光悦の軸　町
暮早し京の疎林の群雀　巳
小学校の給食の刻　悠
レントゲン己の骨の愛ほしく　民
秋の芝居に幽霊の役　町
文覚忌はやばや敷かる床二つ　町
虫鳴きやみて後朝の月　巳
万博をロボット嬢が案内す　悠
フォーが人気のベトナムの店　巳
花浴びて会ひたる金銅釈迦如来　町
蜂ぶんぶんと廻る回廊　執筆

連衆　島村暁巳　原田千町　内田遊民　棚町未悠

熱田神宮奉納百韻について
―奉納までの苦労―　杉山壽子

右の題で原稿依頼がきたのは、奉納が済んだ数日後のことです。

うーうん。苦労ねー・・・。

「終わりよければ全てよし」と、平成五年に熱田神宮で、正式俳諧興行をしたその日、東明雅先生から、いただいたお言葉です。

そお、今回もあの時と同じように、「終わりよければ全てよし」と先生のお言葉を思い出してをりました。

となると「話はこれで終わり」となるわけですが、そうもいかないのですよね。

そんなわけで何をお話すればよいのでしょう。

小林様から熱田神宮への奉納万句がしたいと申し出がありました時は「ムムッ・・百韻ね」と唸りました。「何故今百韻?」と聞いてもみました。

この事は明雅先生にもご相談いたしました。小林さんの希望を叶えるとすれば熱田神宮で地味な活動を続けている、桃雅会の活動の延長線上でしていただく事になります。

「都心連句が参加くださるのならいいですよ」と申し上げました。彼のお人柄をよく存じ上げませんので、多少の不安がありました。連句協会総会後、都心連句の方との打ち合せをすることになりました。その時に近藤蕉肝様と今村苗様が出席されていました。蕉肝様のお顔を見て、不安は安堵に変わりました、というのは、熱田神宮で初めて桃雅会が正式俳諧をしました時に、蕉肝様が駆け付けてくださいました。その時は初対面でしたが明雅先生から直接にご紹介を受けた方だったからです。蕉肝様がいらしたことで、万句奉納を固めたことは事実です。明雅先生がご紹介下さった方が関わって下さるのであれば良いと思いました。不安な気持ちが一歩前に進みました。

さて、苦労した・・二つめ?。

第一回目の熱田神宮奉納に関する手紙が皆さんのお手元に届いた後から、私は叱責やら注意やら、非難の矢面に、立つことになりました。百人百色とはこのことです。

皆さんの私へのあたたかいご声援であったと解釈しております。

名古屋は多くの方が知らないだけで（もちろん名古屋は宣伝をしないことによりますが）何方が入り込んできてもびくともしない土壌があり、受ける私にもゆるぎない覚悟がありました。それは、俳諧に於いても、寛永俳諧奉納以来の伝統が支えてくれるものだからです。皆様にはご心配をかけたと思いますが私の不徳のいたすところとお許し下さい。

私の一貫した姿勢の中に、「人に意地悪だけはしたくない。奉納をしたい方にはして頂き、お手伝いはしよう」ということでした。熱田神宮で例会をしている桃雅会ですが、私達だけの神宮ではないと思いますし、誰でも祈りを捧げて良い神宮です。桃雅会は「来られるお客様達に失礼のないようにしましょう」と共通合言葉のもとに会員が働きました。

土屋様、小林様は連句にたいして熱い思いが流れておりました。お互いに平成の大事業をしようとされて、じょじょに全国の連句愛好者達が、応援の形で参加され、大きな成功に導いたと思います。その成功に桃雅会の地味な正式俳諧の蓄積がお役に立てて良かつたと思います。

名古屋は塵芥の分別が細かく、桃雅会の会員が、手掴みで皆さんの残飯を処理しました。特に長谷川芳子さんと古賀幹子さんには大変なご苦労をかけました。全員協力してやった事は、明雅先生と和子先生はしっかりと見ておられたと思います。「熱田神宮は壽子さんの好きなようにしたら良い」と大きな心で許して下さった明雅先生には心から感謝します。奉納終了後、土屋様から、お礼のFAXが入りました。一句したためてありました。

おお五月「食後の唄」を口遊み　実郎
大きい仕事終へて薫風　壽子
苦労などなんにもなくてあっけらかん　壽

以上

明雅先生のお手紙

内田麻子

高橋玄一郎文学全集第一巻「落落鈔」と云う、昭和五十一年、木菟書館発行の連句と評論の集がある。書館主の轟太市は、私の所属短歌「原型」の発行主であり、連句の道に入ったことを認めて、ある折在庫を送って下さったので、房連庵の勉強中の連衆のテキストとして、読んで行きましたが、昭和四十年代、五十年代の世相も、玄一郎他の多才な連衆の付味も、しばしば立往生の私でした。その間一度だけ、疑問点を明雅先生にお伺いして、御返書をいただいた事があり、御返書は、房連庵に下さったものですが、又、先生の教えを受けた皆のものでもあると思い、連句の付味についての、更なる奥処を探る為にと御披露する次第です。

明雅先生の御返書　平成十四年十月十三日

抜けるような青空の日が続いております。お手紙拝見、お変わりなく房連庵の連句会続けておられる由大慶に存じます。

また、その折「落落鈔」をテキストとして鑑賞したり創作されたりしておられる由益々うれしくなって参りました。高橋玄一郎さんは、信大連句会の最初からのメンバーでありましたが、ご存じの通り長野県詩人協会の会長まで勤められ、詩は勿論小説も沢山書かれました。

「詞の魔術師」とよばれた人だけに、その作品集を読むことは、いろいろ豊かな発想を生むのによい手懸りになる事と存じます。おたずねの「反世界論」という詞も、その語源あるいは正確な説明をした辞書などは知りません。おそらく詞の魔術師たる高橋さんが作り出され、それを仲間の我々がおのおの無責任に使った言葉でしょう。これは昭和五十年代の社会、思想を回想すれば、おそらく想像されうるところかと思います。

ともかく「春湖の巻」に出る

「反世界」詩人は常に眼帯を

という句が高橋さんの面影の句であることは確かです。

次にトリレンマはｔｒｉｌｅｍｍａで「三者択一の窮地」となっておりますが

「京言葉の巻」

北西の季節風落ちトリレンマ

は何がトリレンマなのかはっきりしません。それを隠して言わないところが「詞の魔術師」うまいところでしょう。後略

春湖の巻　小出きよみ捌

四月馬鹿親父の若き手紙読む　K

涙流してすするラーメン　明雅

城楼の試胆会場たくらみあり　玄一郎

ジャラジャラポンとオール三十　K

チエホフの熊の寝返り結氷期　郎

桐の実凍てし音をききつつ　同

「反世界」詩人は常に眼帯を　雅

異常屈折逃げ水の原　郎

金髪と薬と酒と短筒と　雅

苦味走ってうす暗い顔　きよみ

ミラーより外すは惜しや月の影　K

秋刀魚よ秋刀魚今日も昨日も　雅

シャーマンの鬼の面に秋時雨　郎

じゃがたら文に挟まれし萩　同

退官す最終講義「ツアラトストラ」　K

老歯科医師に良き歯抜かれて　同

一鞭を呉れる兄弟花の馬場　み

桑解く風の川瀬光らす　郎

昭和四十八年二月二十五日首尾

京ことばの巻　宮脇昌三捌

霧の舗道に首飾り売る　静生

北西の季節風落ちトリレンマ　玄一郎

かくれマリアもいつか見せもの　芹川

ピポピポピ車公害絶え間なく　明雅

航空便の届く永き日　生

生涯を花にささげし物語　昌三

苔の碑なぶる陽炎　三

連句雑感

高瀬美保

「座の文学」という言葉に何となく気をそそられ、誘われるままに首を突込んだのが私の連句入門の経緯であった。あれからもうかなりの年月を連句に関わり、多くのお仲間と出会い、折々に楽しく遊ばせていただいて来たが、どうもいまだに私は「連句」に対しての真剣さというか、打ち込み方が足りないように思えるのである。今頃こんな事を言うと先輩の顰蹙を買いそうだが、一巻の作品の良し悪しが本当のところよく解らないのである。歌仙一巻を読むとする。作法、式目に障りがあるか否かはおおよそ解る。そして部分的にこの句とこの句の付け味は抜群だナとか、この句は深いナとかの鑑賞はするのだが、全体の醸し出す味がうすいようで、何か物足りない感じを持ってしまう。「転じ」を何よりも大事にする連句作品の場合は、ストーリーを描くものではないと承知はしているが・・。そんな思いもあって、どちらかと言うと私は「捌き」なるものがあまり好きになれないし苦手でもある。出来れば座の雰囲気を楽しみ、気儘に付句を出して遊んでいたいのが本音。時折「捌き」を仰せつかった後は、何か欲求不満のような思いと、捌きの作品となることへの違和感がいつも残るのである。

過日、角川の『短歌』誌上で馬場あき子氏を中心とする若手の女流歌人達が五人で巻いた歌仙「白梅の巻」を読んだ。その作品の内容はともあれ、私はその歌仙を巻かれる過程のそれぞれの歌人達の感想や会話などをまとめた記録の方により興味を覚えた。

連句よりも短歌に長く親しんできた歌詠みのはしくれの私、連句の座に仲間入りをした最初の頃は、どうしても自分の世界、自分の句に拘ることが多かったように思う。前句を引き立て、次の句を生かすさり気ない句の良さよりも、中味の濃い句を作りたがる傾向が間々あったような気がする。短歌は「われ」の心の内を中心に詠むもの、その癖が容易に抜けなかったのかも知れない。馬場氏のほかはあまり連句経験の無い若い歌人達が、私の思いに似たことを、こもごもに語っていたのが印象深かった。どうやら歌人というものは、自身の世界に拘り、自身の句に意味をもたせようと意識するきらいがあるらしい。

俳句はリアリズムの文学、短歌はロマンチシズムの文学とよく言われるが、俳人に比べ歌人達が連句の世界にあまり関心を示さないのも、この辺りに問題があるのかも知れない。その座談の中で、「連句」は連衆各人の詩心と、全体の調和によって一巻が成り立つのであろうとの小島ゆかり氏の発言に共感した。花、月、四季折々の風物を吟じ、恋、人情、世の様を盛り込み、清も濁も紡いで描く連句の世界、歌仙は交響曲のようなものなのだ。「捌き」はその曲を奏でるための指揮者。連衆の詩ごころとハーモニーを大事にし、良き指揮者となれるよう遅まきながら心がけてゆきたい。

わたしの初捌

梅田實

ACCに3年通い、平成一四年三月修了の時に初捌きをさせていただきました。私は幸運にも明雅先生とご一緒させて頂いております。

二十韻　「鳶の笛」

うららかや蒸気舫ひて鳶の笛　實
柳の絮に声挙げる児ら　常義
袴姿卒業生の集まりて　明雅
門前町の洋菓子の店　一枝
風鈴(ウ)の音いろいろに夏の月　要子
ででむしとりに誘ひ合せて　珠枝
はじめての手作り弁当ほめる彼　佐紀子
家族新聞ホームページで　枝
敬語しか使へぬ御侠ひとりゐる　珠
どこかが違ふ今の若者　同
雪座敷(ナオ)座敷わらしが住みつきて　雅
塩汁鍋に遠来の酒　要
君がため石でしとめた今日の糧　枝
能登の七尾に老いし愛妻　雅
月の客最終列車で到着す　義
ひょんの実吹いて門に立つ我　紀
秋(ナウ)の影人面相の迷ひ犬　珠
烏鷺の争ひ銭湯の連れ　實
花朧ヘリコプターの灯を見をり　義
紙風船の打ち合ひをして　要

羅浮亭正江宗匠　追善之歌仙
脇起り「しらむまで」

しらむまでこの世の貌で踊るかな　正江　仏
袖のゆらぎに有明の月　橘　文子
小さき手に団栗のせて見するらん　鈴木千惠子
看板描きの親子住みつき　佛渕　健悟
次々と駅前書店地方都市　佐藤　良彌
時事放談はラムネ飲み飲み　松本　碧
海亀と鯰占ふ海の鳴り　椿　紀子
まづは頼まむ棕櫚の大木　浅賀　丁那
一夜妻昔の名前で呼んでみる　千
うなじの黒子ほのと色増し　文
饅頭のこれほど淡き味も稀　彌
知日派といふ領事うるさく　悟
冬の虻黄門様をはやしたて　紀
木曽路を急ぐ三度笠なる　碧
橋ま中涼しき月を振り返り　那
ヴィンテージワイン入荷着信　文
花ふぶき薬師如来のふうらりと　千
ちょっと来いとは小綬鶏の癖　悟
若鮎の掴み取りなど楽しみに　彌
糠雨の中舟を干すひと　碧
親よりも先に行ってはいけないよ　紀
逆回転の玉打ち返す　那
戦なき星見つけたり貘枕　文
愛猫の名はマリちゃんと言ひ　千
待たされて待たれて同じ家なき子　悟
同窓会で逢ひし麗人　彌
幾山河耐へし想ひの爆発し　碧
ちろろちろろと松虫のこゑ　那
月光の縞々細し手織機　紀
銀漢を見る佐渡の岩鼻　文
残る蚊を打たぬものとは知りながら　千
遅筆の業を悟る文豪　悟
禁煙の禁を破るをはばからず　彌
球界ストに応援の列　碧
新しき花また花の長堤に　紀
穀雨やさしく濡らす踏石　那

平成十六年九月二三日　首尾
小石川後楽園「涵徳亭」

歌仙
「奉る」

奉る俳諧経や秋彼岸　佛渕　健悟
一去一来けぶる名月　佐藤　良彌
ペン皿に椎の実ふたつ転がして　松本　碧
アルカリイオンの水を注文　椿　紀子
潮騒の丘の上まで届きくる　浅賀　丁那
きのふもそこに居りし尺蠖　橘　文子
袴能橋掛りゆくしづしづと　鈴木千惠子
攘夷の声の高まれる世に　悟
土良猫の親子たはむれ庭の石　彌
こころの傷はなめ合ふものよ　碧
御柱をめぐりめぐりて修羅を生み　紀
枯野をひゅると風の過ぎゆく　那
月の影スワン王子に変身し　文
だまし舟折る赤い折紙　千
この線を越ゆれば神の笑ふ町　悟
レリーフ彫りは大英博に　彌
ターナーの絵に散る花に一夜酔ふ　碧
朧の空に誓ふ回天　紀
清明の鹿教湯の出湯のあふれゐて　那
健康オタク茹玉子好き　文
イチローが入念にするストレッチ　千
後の正面前も正面　悟
政治家は舌抜かれても白を切る　彌
地震と噴火と火事とハリケーン　碧
こっそりと君のもとへと女宮　紀
三日を逢はぬ想ひ薫きしめ　那
脱ぎ脱ぎて捨てゆく重き旅鞄　文
風が吹いても痛き痛風　千
繊月の街に降りくる硝子片　悟
名の木散る径かさこそと踏む　彌
ざくろの実赤児が掴む聖母像　碧
戦の過ぎて黒牛の黙　紀
山稜のサインコサインゆるやかに　千
これが自由ぞ教授定年　文
骨酒をふっと乾したる花の宵　那
亀鳴くころと約す観劇　彌

平成十六年九月二三日　首尾
小石川後楽園「涵徳亭」

羅浮亭正江宗匠一周忌追善
脇起り二十韻　「茴香の香」
倉本路子捌

茴香の香にまぎれたる話かな　正江仏
高みより来て去らぬ夏蝶　文子
島へ向く船の汽笛の響くらん　和代
カフェテリヤに憩ふ人々　冨美
シースルーエレベーターに見たる月　路子
おわら祭の夜に出会ひて　豊美
水茎に想ひ託せし秋扇　文
やうやう育つ遠来の朱鷺　代
遺伝子か秀才揃ふうからなり　美
宝石飾る細きステッキ　路
北風を連れて山から風小僧　豊
無頼作家の月に爛酒　文
調律師仕上げの曲を滑らかに　代
クールビズには賛否両論　美
君の影前頭前野をひとり占め　路
恋の医学書探す本郷　豊
二百号裸婦像のあり奥の壁　文
雄の仔猫にマリと名が付き　代
今年又行く先決めず花遍路　美
紺の紬にかかる淡雪　路

連衆　橘文子　長崎和代　村田冨美
高橋豊美

平成十七年六月十四日　首尾
於　白山「のむら」

事務局便り

◇ご入賞おめでとうございます。
全国連句いなみ大会
南砺市長賞
鈴木千恵子「一文字ぐるぐる」
浪化記念賞
鈴木了斎　「爪の屑」

◇新人会員紹介
手島伸子（名古屋市）
松尾博雄（名古屋市）
近藤蕉肝（東京都）
蔦とく子（仙台市）

◇猫蓑会催事予定
日時　平成十七年十月十九日（水）
十一時半より十七時
（受付十一時）
俳諧芭蕉忌正式俳諧
明雅先生三回忌
終了後　二十韻興行
場所　江東区芭蕉記念館

◇同人会新同人紹介
古賀一郎　生田目常義　青島ゆみお
武井雅子　須賀敬子　松島アンズ
林鐵男

訃報

新同人古賀一郎様が、七月九日急逝されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

◇猫蓑発展基金にご協力有難うございます。
原田千町様（未来図）　一万円
神楽坂連句会様　二万円
基金の口座　みずほ銀行新宿西口支店
普通3376045
猫蓑基金

◇猫蓑作品集第十五号およびバックナンバーご入用の方は、左記にお申し込み下さい。
〒277-0051
TEL・FAX〇四―七一七二―八一一九
柏市加賀二―十二―十一　梅田利子

◇猫蓑会十七年度当番幹事
生田目常義　青島ゆみお　武井雅子
須賀敬子　松島アンズ　林鐵男

季刊　『猫蓑通信』第六〇号
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒182-0003
東京都調布市若葉町
二―二十一―十六
編集人　橘文子　棚町未悠　林鐵男